

人生を拓く

49

寺林信雄さん(94)
|| 南町1 ||

妻、文子さん(平成27年、84歳で逝去)が開いた「居酒屋笹」を夫唱婦随で盛り上げ、繁盛店「笹寿司」(南町1丁目基線)に育て上げてきました。

富山県から入植した父、与三次さん(昭和4年ごろ、63歳で没)、母、レイさん(同63年、93歳で没)の長男として西2号で生まれ育ちました。

東川尋常小学校高等科を卒業後、14歳で実家の農家手伝いに。21歳の1944(同19)年、戦時召集を受けて旭川4部隊に入隊。札幌真駒内駐屯地に移動し、そこで終戦を迎えました。

1949(昭和24)年、26歳で旭川市宮下に住んでいた文子さん(当時19歳)と見合い結婚。「電車で嫁入りしたんだ」と、「旭川―東川」間を走っていた旭川電気軌道に乗っての輿入れでした。一世一代の華やかな輿入れとして当時人気で、近所中が湧き返りました。

結婚後、西3号北1線の本家の隣に分家し、約5反(50ア)の水田を耕作しました。しかし専業農家では暮らせず、その年間もなく旭川のパルプ工場に勤め、原木の表皮皮むき作業員として生計を立てました。その後、当時町営ホテルだった旭岳温泉「えぞ松荘」



3人の兄弟一家も加わる大家族経営でも人手が足りないにぎわいだったそうです。毎年元日に息子、孫、ひ孫約30人が集ってお年玉交歓会を開き、「元氣な一家の姿が集うのが楽しみ」という信雄さん、笹寿司の初代として今でも毎日店に顔を出し、割りばしの袋詰めに欠かさないそうです。

に。「昼ごろ部屋の片づけから始まって、みんなが帰るまで。寮で泊まり込みも多かったな。9年間の間で自宅に帰ったのは1カ月に1回程度しかなかったさ」とほとんど泊まり込みだったそうです。

その間に文子さんは西3号基線におでんを主に「居酒屋笹」を開業(昭和43年)。鯉料理・加賀屋の店舗跡に移転すると、昭和50年代には2階のお座敷に仲居さん4人昼夜20人くらいの出前持ちを雇うほどに大繁盛店に。1980(同55)年、信雄さんは新たに建て直すことになった店(現店舗)を手伝うため、ホテル仕事を辞めて裏方に入りました。

文子さんが女将として店を仕切り、信雄さんは季節の山菜取り、じゃが芋の皮むきに汗を流し、「寝てるヒマないよ!」と文子さんの大声が飛び交うほどに連日大忙し。3人の兄弟一家も加わる大家族経営でも人手が足りないにぎわいだったそうです。

俳句

花冷や出産間近の眼の優し
潮強か宗谷の風と春の雨
白き花見つめいる猫春の雨行く
うす緑そのまた先に光る春
軽トラに最後の苗を積む日かな
笑ってるような泣き顔月おぼろ
里の山醒めよと辛夷咲きにけり
春の闇狂った月は封印す
細々と寒煙上る町工場
山峡やただ一匹の鯉幟
スキップから希望溢れる春むすめ
球根をまた買ひ足して植えており
撫でてみる柱のキズの端午かな
愛おしや穀雨の土に染み入るは
風に触れ田は輝きて早苗待つ
幼子のふた言ことば風五月

本田 咲
佐々木 りえ
斎藤 夕桜
山内 みゆ
由川 真人
小林 ろば
杉山 ひろのり
保科 なほ
徳光 吐苦
杉山 りつ
こばやし 星来
横田 則子
高瀬 潤
石澤 清宏
三島 智
若田 郁

